

果試ニュース

第10号 平成11年3月

カンキツの安定多収生産と試験研究

先の農水省果樹試験場が主催する常緑果樹課題別研究会の栽培分科会でカンキツの隔年結果の問題がとりあげられた。

その中でこの数年の間に顕著な隔年結果を誘起した要因は、開花結実期の高温や日照不足による生理落果の助長、あるいは夏季の高温乾燥による樹勢低下など、気象要因が引き金になっているとするものであったが、他方で栽培的要因として、せん定・摘果などの結実管理の不足、土壌管理の不徹底や施肥の減少、高品質をねらって着果負担をかけたことなど、基本管理が十分できていないことが指摘されている。さらに、産地によっては密植園や老木園が増えたこと、マルチ等によって過度の水分ストレスをかけたことなどの意見もあった。

こうした管理不足による隔年結果の助長要因の背景には生産者の高齢化に伴う労力不足が大きく介在しており、適期適作業ができていないところが多くなっているものと考えられる。

試験場では改植にあたって園内作業道をつけた「温州ミカンの並木植え小樹化栽培」を実証し、また既設成園で、樹形改造して園内作業道を設置し、管理作業が楽にできるような、「傾斜地カンキツ園の軽労働省力生産体系」も実証した。園内作業道さえつけておれば、収穫果実や肥料などは運搬車を使い、かかえ作業を少なくできる。また傾斜地の薬剤散布は重労働である。これにはスプリンクラー防除が効率的であるが、作業道から散布する専用機械も開発されている。このように、作業道に軽量機械を入れて、重労働の作業を軽労働にすれば、少ない労力の中でせん定・摘果など手間のかかる作業の方に労力配分できて、また有機物施用による土壌改良や液肥散布による樹勢回復など、隔年結果防止にもつながる管理に労力を生かすことができるわけである。現に、「えひめみかん祭り」の圃場コンクールで入賞したかんきつ園は、連年安定した生産量をあげており、隔年結果性は見受けられない。入賞園は、日ごろから土づくりなどの肥培管理やせん定・摘果などによる結実管理に徹しておれば、気象条件が原因して隔年結果しても、その程度は軽いことを示している。

しかし、このところの異常気象により、また労力不足で管理不徹底により、現実に隔年結果が著しくなっている。

このため、試験場では11年度から、気象条件の変化に即応した結実管理技術と労力不足の中での省力的な隔年結果防止策を検討し、あらためて高糖果の連年安定生産技術の実証試験に取り組むことにしている。

場長 向井 武